2006 年 6 月 17 日（土）

WATARI-UM 美術館主催の講演会

熊楠の森を知る　第 2 回

「南方熊楠と淡水藻・キノコ・菌類」を聴講して

国立科学博物館　植物研究部　植物第 3 研究室（微生物）の萩原博光氏の講演を聴講した。講義の前半で南方熊楠（1867～1941）の生涯を年表に沿って、業績、交友関係、昭和天皇へのご進講、研究内容と評価などについて説明があった。国立科学博物館のホームページに南方熊楠についての次のような要約があり非常に判りやすい。「幼少より博物学に興味を持ち、明治～大正～昭和にかけ活躍し、“生きた百科大事典”ともいわれた国際的な学者。 1886年にアメリカへ渡り、植物の宝庫のフロリダやキューバなどを探検。続いてイギリスへと渡り、大英博物館で古今東西の知識を吸収しました。1900年に帰国し、その後は民俗学的著作を次々と発表しながら、隠花（いんか）植物と呼ばれていた菌類（きんるい）・地衣類（ちいるい）・藻類（そうるい）・蘚苔類（せんたいるい）などを精力的に採集して研究。日本における、変形菌分類学の基礎を固めました。」

http://research.kahaku.go.jp/botany/henkeikin/index.html

熊楠は 1889 年10月 21 日の日記に「吾れ欲くは日本のゲスネルとならん」と記しており、ゲスナーの伝記を読んだことがその後の人生を決定的にしたことがうかがえる。

彼の人生は大別して 3 期に分けられる。第 1 期は 1900 年までの米英での研究時代、第 2 期は 1900～1910 年の和歌山県（那智、田辺）における生態調査、土宣法竜宛て書簡の中の「南方マンダラ」世界観、神社合祀反対運動、第 3 期 1910 年以降は第 2 期を基礎とした展開、特に 1926 年には粘菌標本 90 点を昭和天皇へ献上、1929 年田辺湾を訪れた昭和天皇へのご進講は当時の東京朝日新聞のトップ記事となった。

熊楠の研究は「四天王」、「三羽烏」などと呼ばれる共同研究者や弟子達によって大きく発展した。しかし、彼は論文らしい論文を書いておらず、彼の足跡を知るには学術雑誌へ投稿した目録と日記によらねばならず、隠花植物研究では高い評価を受けているにも拘らず、真の評価は今後の研究に待たなければならない。

後半の講義は粘菌（変形菌）の一生と言うビデオを見ながらの解説であった。

会場の壁際に沢山の顕微鏡が並べられ、各種の粘菌を観察することが出来た。また、筑波の研究室とインターネットで結び粘菌内部の原形質の移動の様子をリアルタイムで観察できた。粘菌を実際に観察したのは始めてであるが森の枯葉の付近でしぶとく生きる芸術的な生物に感動した。